

学会彙報（二〇二二年七月～十二月）

仏教学会活動報告

◇新入会員歓迎講演会

七月十四日（木）午後一時～

於 慶応館（K四〇四教室）

本学教授 三宅 伸一郎氏

講題「大谷大学のチベット研究ことはじめ

—小栗栖香頂と寺本婉雅—」

◇公開講演

十一月十六日（水）午後四時三十分～

於 響流館（メディアホール）

東洋大学名誉教授 森 章司氏

講題「釈尊伝研究から見た原始仏教の風景」

『仏教学セミナー』第一一六号をお届けいたしました。

新型コロナウイルスの感染者も増加と減少を繰り返し、なかなか収束のめどが立ちません。しかし、二〇二二年度になつて、少しずつですが学会等の状況も変わりつつあります。これまでオンラインで開催されていた学術大会等も、中・小規模の学会・研究会では対面やハイブリッド形式の開催が試みられるなどの変化が見え始めました。本学の仏教学会では、二〇二〇年度・二一年度と中止や延期を余儀なくされた恒例の公開講演会を対面とオンラインの併用で開催することができました。

大学の授業でも、研究活動でも、オンラインでの開催にはもちろん便利な面が多い一方で、人と人との関係が希薄になつてしまう側面は否めません。日常の授業においても、ふだん険しい顔をしている学生が、話題によつてはにっこりほほ笑む瞬間があつたり、いつも下を見ている学生が急に教員の顔を見て話を聞く瞬間があつたり、こうした学生の機微を察しながら、教員も授業の内容や方法を工夫していきます。対面であるからこそ得られるメリットも多くあるでしょう。

学会や研究会においても同様だと思います。質問やコメントはオンラインでも可能ですが、そればかりではなく、聴衆の何気ない反応や会話などによつて新たな課題が得られることも少なくありません。コロナ禍によつて、学外の研究者との談話や意見交換・情報交換などの機会が激減してしまったことは残念

なことです。特に初めて学会で発表する大学院生たちは、せっかく発表して質問をもらつても、その後、学外の先生や研究者たちとの交流が広がりにくいという問題を抱えています。こうした事態は、将来の学術の進展にも何らかの影響を与えることでしょう。

マスクをつけなければ他人と会話できないという異常な事態が続きますが、今年度も本誌を刊行できたことは、執筆者ならびに関係各位のお力添えによるものと思います。本学仏教学科からは山本和彦先生・箕浦暁雄先生からご執筆をいただきました。また、学科主任の三宅伸一郎先生による新入会員歓迎講演会での講義録を掲載することができました。学外からは松田和信先生・ハルトマン先生、また本学の元任期制助教の稲葉維摩先生からもご執筆をいただきました。最後になりましたが、あらためて御礼を申し上げます。

(K.T.)